

いろは文字鉾くさり（その三十四―和洋ハイブリッド 沙翁登場さきう）

・
・
・
・
・

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを

わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ

うゑのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて

あさきゆめみし えひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

（ん）

一 何時いづつの世よのころ

ロメオのころは

花やかたの館たねに 匂にほふ妹いもなほ

炎えんの恋こひへ …

（シエークスピア『ロメオとジュリエット』）

二 へいハムレット

問とふや行く道みち

ちぢ乱みだれあり 理まじにも惑まどひぬ

抜ぬ身みぞ吠ほゆる …

（シエークスピア『ハムレット』）

三 瑠璃の玉の緒

女に腕輪

和詩も添へむか

馨しき子よ

詠み交はす歌

玉の句となれ

四 烈士オセロそ

その勇馳せつ

強き心根

念ず妻の名

何ぞイアーゴら

乱企謀らむ

(シエークスピア『オセロ』)

五 空しや有情

現遊び居

居残る人の

後悔しおお

思ひは重く

暮るる時はや

やよ生くるまま

磨涙重け

世の中は 空しきものと 知る時し いよよますます 悲しかりけり

(大伴旅人『万葉集』巻五―七九三)

六 景見て思ふ

古き海ここ

今宵波越え

永雲湧きて

照る入日ああ

天の大きさ

さぞ清明けき

清月待たゆ

渡津海の

豊旗雲に

入日さし

今夜の月夜

清明けくこそ

(中大兄『万葉集』巻一―十五)

七 夕さり眺め 愛づるや淡海

見聞き懐かし 志賀の鳥声

絵凌ぐ夕日 比叡の山も

百世偲ばせ 為む方知らず

淡海あふみの海うみ 夕波千鳥な 汝が鳴けば 情こころもしのに 古いにしへ思ほゆ

(柿本朝臣人麿『万葉集』卷三―二六六)

二〇二五年(令和七年)二月九日

註

副題Ⅱハイブリッド、近年ガソリンエンジンと電気モーター併用の車のことをよく言うが、単語としては「異種交配」、「雑種」。

沙翁Ⅱ昔はシェークスピア(1564-1616)に「沙吉比亜」、「沙士比阿」などと当てたそうだ。

翁は男の老人(また老人を敬う語)。

ⅠⅡ出足、最近話題になった「〇〇物語」の冒頭を借りたわけではない。

互いに反目する名家の薄幸の恋人たちの悲劇。

ⅡⅡ父である先王の死の状況を先王自身の亡霊から知らされたハムレットの復讐心と苦悩。

問ふや行く道 ちぢ乱れありⅡ例えば、かの有名な To be, or not to be: that is the

question:。この坪内逍遙訳は「世に在る、世に在らぬ、それが疑問ぢや」。

抜身ぬきみぞ吠ほゆるⅡ妃(母)の部屋で母を諫めているとき、カーテンが動いた。現国王(父の仇)

が隠れていると思ったハムレットは抜くが早いが一突きに……。が、その相手は……。

四〇ベニス軍の総督ムーア人オセロと愛する白人妻デズデモナ。軍の中で自分を取り立ててくれないオセロを恨むイアーゴはデズデモナの一枚のハンカチを種に奸計をめぐらす。

五〇世の中は……。大宰府在任中、不幸、訃報が重なるなかで旅人が詠んだ(この歌の前年、妻の相伴郎女が没した)。

有情うじやう感情を持つているいっさいの生物。山川草木に対して人間、鳥獸じふ。衆生じゆじふ。

磨まろ涙重しけ磨しは、われ、わたくし。涙が止まらない。

六〇渡津海わたつみの……。中大兄(後の天智天皇)の歌。「その二十三」でも取り上げた。斎藤茂吉が

「万葉秀歌」で筆者を万葉集に引き入れた歌。

七〇淡海あふみの海うみ……。和洋の洋で御大沙翁なら、和では歌聖人磨まろに締めてもらおうと呼んだ。

もう何年も前、「その十二」ではこの歌を頭に描いて作った。

後記

もう出来ぬ。いろは文字鋤断筆。

と言っではいたが、またおかしなことをやった。気まぐれ以外の何物でもない。後記といっても述べることはない。

以前に採った万葉歌を素材にすることはあるが、全くの別作。「一度使った句はそのままでは二度と使わない」という筆者の決めたルールがある。